



2

システムトレードの実践

目次

2-1. バックテスト.....	6
バックテストとは.....	6
◎ 現在を起点に過去の相場を振り返ること	
◎ 売買手法の優位性を確認できる	
バックテストのメリット.....	6
◎ 試行回数を確保できる	
◎ 短時間で大量のテストができる	
バックテストのデメリット.....	7
◎ システムが使えないと時間と労力がかかる	
◎ 数学的、統計的な基礎知識が必要	
バックテストのデータの見方.....	8
①損益累計	
②勝率	
③最大DD（ドローダウン）	
④1トレード最大リスク	
⑤トレード回数	
バックテストの注意点.....	10
◎ 取引回数が多いほど信頼性アップ	
◎ 過剰最適化の罠	
◎ シンプルなロジックほど長く使いやすい	
◎ 成績が良すぎるものはフォワードテストが重要	

2-2. フォワードテスト.....	12
現在を起点に、未来に向かって売買ロジックをテスト.....	12
ウォークフォワードとリアルフォワード.....	12
フォワードテストのメリット.....	13
◎ バックテストが良かったロジックが優位性を保っているか分かる	
◎ 不調から好調に転じたロジックが分かる	
フォワードテストのデメリット.....	14
定期検診をしよう.....	14
◎ 検診の頻度	
◎ 最大ドローダウンを更新した場合	
◎ 地合との関係で判断	
2-3. 市場、売買ロジックの変化.....	16
市場の地合いと売買ロジックの相性.....	16
◎ 補い合うロジックの組み合わせを見つける	
変化のタイミングを探る.....	17
◎ ファンダメンタルズから探る	
◎ 長期チャートから探る	
リーマンショック (2008)	
アベノミクス (2012~2015)	

売買可能時間とエッジ（優位性）	19
◎ 取引時間が変化すれば優位性も変わる	
◎ 祝日取引可能による影響	
2-4. 投資家の心構えと目標設定	21
資金の金額と計画	21
日々の行動が一人前のシステムトレーダーを作る	22
リスクを受け入れる	23
自己投資	23
2-5. 売買戦略のための分析	25
移動平均線	25
期間5の移動平均線	
期間20の移動平均線	
期間200の移動平均線	
ローソク足パターンと投資家の心理	27
◎ ローソク足の基礎	
◎ 直前の動きを否定する形を見つけよう	
ボリンジャーバンド	29
高値と安値、価格位置	30
RSI	31

VIX指数..... 32

アノマリーと季節性（シーズナリーパターン） 32

ダウとの相関..... 32

市場ごとのクセ..... 33

- ◎ 先物はヘッジに使われやすいから下がりやすい
- ◎ 個別株やETFは長期的には上がって行きやすい
- ◎ FXはレンジになりやすい
- ◎ ゴールドは株価が下がると上がりやすい

2-6. 税金について..... 35

個別株・ETFと先物は違う税制
税率はどちらも同じ20.315%
カテゴリが違くと損益の通算はできない
負けた分は3年間繰り越し可能
経費の幅は先物の方が広い
株・ETFは特定口座で運用

2-1. バックテスト

バックテストとは

◎ 現在を起点に過去の相場を振り返ること

過去から今そのときまでの値動きを基に、売買ロジックなどをテストするのがバックテストです。今から未来に向かってテストをするフォワードテストとは、時間軸が明確に異なります。

同じ相場の動きはありませんが、似た動きはこれまで何度も繰り返されてきたため、過去の相場に通用したやり方は、これからの相場でも通用する可能性があります。

◎ 売買手法の優位性を確認できる

過去の値動きをデータ化して売買をシミュレーションすることで、あるトレードのアイデアがどれくらい過去の相場に通用したかが分かります。

また、チャートを過去にさかのぼって俯瞰することによって、傾向や優位性を見つけられるかもしれません。これもまた広義のバックテストといえるでしょう。

バックテストのメリット

◎ 試行回数を確保できる

過去の値動きはすでに確定していますから、たくさんのテストをこなせる点が魅力です。1年で平均10回しかチャンスがないロジックでも、バックテストなら容易にサンプル数を集めることができます。

◎ 短時間で大量のテストができる

フォワードテストで10年分の値動きを分析しようとするれば10年かかりますが、バックテストならはるかに短い時間で終わることができます。

試行回数とも密接に関係しますが、テストは数をこなすほど信頼性が高まります。実運用の前にバックテストをすることで、信頼性の高いテスト結果を得ることができます。

バックテストのデメリット

◎ システムが使えないと時間と労力がかかる

過去の値動きに対して売買ロジックをテストする際、目視で行おうとすると膨大な時間と労力がかかりますし、まず間違いなく計算ミスが発生します。

KENSHIRO-225のようなシステムを用いることで、こういった苦勞からは解放されます。

◎ 数学的、統計的な基礎知識が必要

バックテスト結果から、そのロジックがどのような特徴があるかを見抜くには、ある程度の数学的な感覚が必要です。

高等な数学の知識はいりませんが、統計的に物事を判断することへの慣れは必要です。

バックテストのデータの見方



ポートフォリオ全体のテスト結果

総合運用実績	
最低運用資金	284,550
損益累計 ①	1,159,250
利回り	407.4%
勝率 ②	60.4%
最大ドローダウン(DD) ③	-67,500
最大ドローダウン(DD)%	-18.4%
損益/最大DD	17.174
全体リスク(%リスク管理法)	23.7%
1トレード最大リスク ④	-22,500
1トレード最大リワード	48,000
プロフィットファクター	2.07
1回あたりの期待損益	2,891
負けトレード平均リスク	-7,065
勝ちトレード平均リワード	9,563
年平均損益	124,048
年平均損益/最大DD	1.838
月平均損益	10,337
年平均利回り	43.6%
月平均利回り	3.6%
総トレード回数 ⑤	401
年平均トレード回数	42.9
月平均トレード回数	3.6
最大連勝数	10
最大連敗数	6
引き分け回数	12
期待R倍数・標準偏差レシオ	0.2561
最大ドローダウン期間	300
平均ドローダウン期間	38.98
ドローダウン回数	55

各売買ロジックのテスト結果

①損益累計

全期間の総合的な投資成績です。ポートフォリオにせよ、単体のロジックにせよ、この数字が大幅なプラスになっていることが、運用する前提条件です。

②勝率

全てのトレードのうち、プラス収支で終わるトレードの割合です。もちろん高い方が良いのですが、90%を超えるような極端に高い勝率はあまり現実的ではありません。

勝率が50%程度でもしっかりプラスになるロジックなら、勝ちトレードで利益をしっかりと取れていると判断することもできます。

勝率単体で判断するというより、他の要素と組み合わせて判断するために重要な基準になります。

③最大DD(ドローダウン)

不調なとき、資金がどれくらい減ったかを示す数値です。損益グラフの山と谷の金額差が、全体の資金に対してどれくらいの割合だったかを示します。

最大ドローダウンが深いロジックやポートフォリオほど、大きく減ることに備えてたくさんの資金が必要です。逆に浅ければ、資金に対して大きめのロットを張ることができます。

④1トレード最大リスク

ある売買ロジックの、トレード1回の最大損失額です。バックテスト期間で、1回のトレードで少なくともこれだけ負けたことがあるということなので、今後も同じように負ける可能性は十分にあると解釈します。

⑤トレード回数

全期間、年単位、月単位で何回トレードをしたかを表します。

バックテストの注意点

◎ 取引回数が多いほど信頼性アップ

同じ成績でも、トレード回数が多いほど再現性が高いと判断できます。

特定の季節性を狙ったものならまだしも、取引回数が少ないのに大幅にプラス成績の場合、偶然勝っているだけかもしれません。

◎ 過剰最適化の罠

やろうと思えば、あれもこれもと複数の売買条件を追加し、バックテスト結果を良くすることもできます。このように無理矢理テスト結果だけを良くすることを、過剰最適化(カーブフィッティング)と呼びます。

ですが、その追加した条件に根拠がない場合、再現性がない(未来にも同じことが起きない)可能性が高いです。

そうすると、バックテストの成績は素晴らしく、損益グラフは綺麗なものの、実際に動かすと負け続けるロジックができあがることも珍しくありません。

そして、このように過剰に最適化されたロジックは、テスト上は最大ドローダウンが少なくなるため、ロットを増やしても問題ないという判断になり、その結果大きな負けにつながりかねません。

◎ シンプルなロジックほど長く使いやすい

売買ロジックを緩く作るほど、相場の変化に対応しやすい傾向があります。売買条件を増やしすぎず、勝つときは勝つ、負けるときは負けるというようなロジックの方が、未来に相場が変化しても使い続けられることが多いです。

開発時点で完璧を求めるほど、過去の相場にこだわりすぎていることになり、未来の変化に対応しにくくなっていきます。

◎ 成績が良すぎるものはフォワードテストが重要

バックテスト時点で、非常に成績が良いロジックができた場合は、そこから先が重要です。

成績が良すぎるということは、意識していないとしても、売買のルールを直近の相場に寄せすぎている可能性があります。そうすると、相場の傾向が少し変わるだけで機能しなくなる恐れもあります。

成績が良すぎるロジックが完成した場合、フォワードテストでしばらく様子を見るのが良いでしょう。実際に運用するとしても、枚数は抑え目の方が安心です。

また、相場の変化を意識すると良いでしょう。ファンダメンタルズ、テクニカルの両面でトレンドが変化したのか、そのままなのかを見ていくことで、そのロジックが効く相場が理解できるようになり、未来に似た展開になったときに満を持して投入できます。

2-2. フォワードテスト

現在を起点に、未来に向かって売買ロジックをテスト

バックテストとは逆に、今から未来に向かって、実際の相場の値動き、時間経過でテストをしていくのがフォワードテストです。

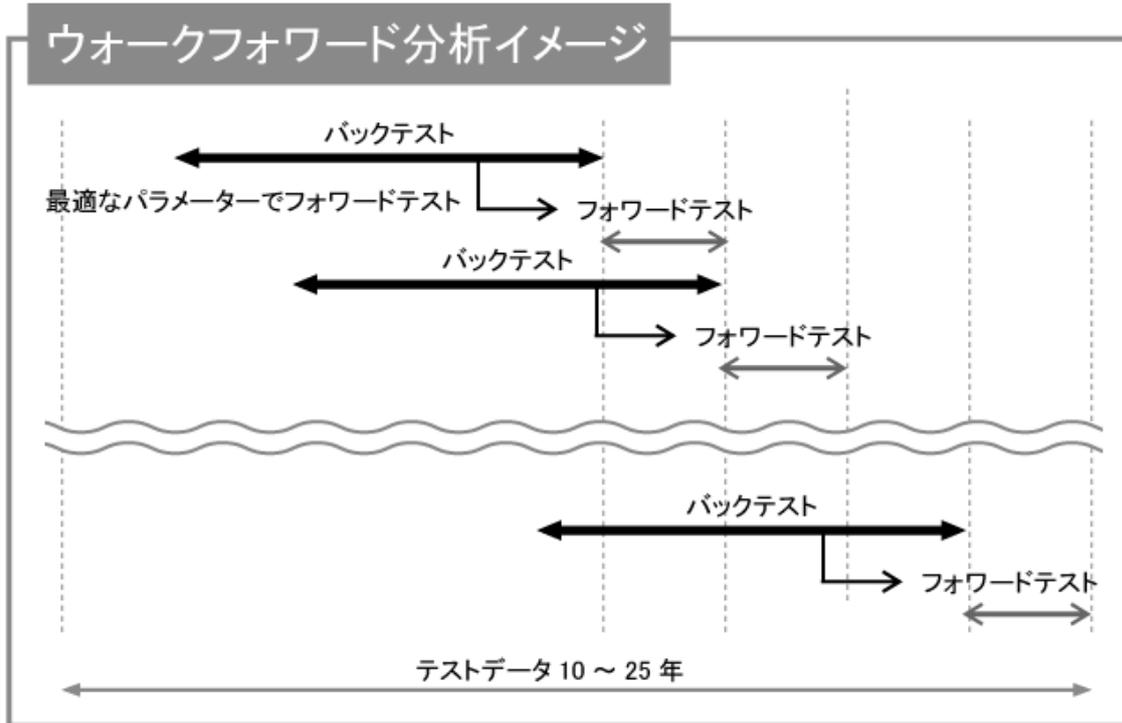
FXなどである、仮想資金によるデモトレードも、フォワードテストと同様の意味を持ちます。

また資金が豊富な人が、最低ロットでテスト的に実資金運用するのも、フォワードテストと近い効果があります。

ウォークフォワードとリアルフォワード

フォワードテストにも2種類あります。

テストに使える過去の価格データが2010年から2020年までであるとして、2010～2015年のデータを基にロジックを作り、2016～2020年のデータで稼働テストをするというように、テスト可能期間をすべて使い切らず、フォワードテストにも回すテスト方法を、ウォークフォワードテストと呼びます。



現在の相場に寄せすぎない、過剰最適化にならないことが目的です。

リアルフォワードテストは、一般的にイメージされているフォワードテストで、勝てるロジックを作り、それがどういう結果になるかを測定します。

フォワードテストのメリット

◎ バックテストが良かったロジックが優位性を保っているか分かる

テストで作った売買ロジックが、実際の相場で本当に勝てるのかを試すのがフォワードテストの目的です。

過去のテストでは抜群の成績なのに、実際に動かしたらさっぱりだったということはとてもよくあるので、フォワードテストはシステムトレードに必須だといえます。

◎ 不調から好調に転じたロジックが分かる

実資金で動かさなくても、作り終わったロジックの実際の動きを見ていくことで、不調だったものが好調になった、だから実資金で動かそうというような判断ができます。

フォワードテストのデメリット

バックテストと比較すると、実際の時間の流れでしかテストができないため、データが蓄積されて判断できるまでに時間がかかります。

ただし、リアルフォワードテストなら、この問題点も解決できます。

定期検診をしよう

◎ 検診の頻度

3か月に1回ほどは、動かしているロジック、休ませているロジックも含め、ポートフォリオ全体の見直しをしましょう。

また、米国の大統領選挙など、マーケットの流れが大きく変わる可能性があるイベント時にも、検診をすることがオススメです。

◎ 最大ドローダウンを更新した場合

また、あるロジックがこれまでの最大ドローダウンを更新したときも、売買フィルタの見直しを行いましょう。いくつかある売買の条件の中で、効いていないものを外す、効くものを追加するといった、直近の相場にある程度寄せるのも1つの手です。

◎ 地合との関係で判断

今の相場の流れを、シンプルに判断することで、合っているロジック、合っていないロジックを仕分けすることも有効です。

大規模な金融緩和があり、なおかつチャートもそれと連動して上昇している場合などは、買いメインで売りロジックは控えめにするなどの調整も有効です。

2-3. 市場、売買ロジックの変化

市場の地合いと売買ロジックの相性

	強い下げ	弱い下げ	下げからの横ばい (ボラ大)	横ばい (ボラ小)	上げからの横ばい (ボラ大)	弱い上げ	強い上げ	レジ付近	サボ付近	横ばい中の下落	横ばい中の上昇
【日中売り】調整局面											
【日中売り】下落傾向狙い							×				
【日中売り】安値ブレイク									×		
【日中売り】ボリバンの逆張り(二)							×				
【日中売り】ナイト停滞							×				
【日中売り】DBY逆張り							×				
【日中売り】BS順張り							×				
【日中買い】反発値合い						○	○		○		
【日中買い】上昇傾向狙い							○				
【日中買い】ボリバンの逆張り(二)								○			○
【日中買い】ナイト買戻し						○	○				
【ナイト売り】順張り							×		×		×
【ナイト売り】前日暴落	×										
【ナイト買い】上昇傾向狙い(木)											
【ナイト買い】SB順張り											
【スイング売り】逆張り											
【スイング買い】中長期押し目											
【スイング買い】上昇局面入り											
【スイング買い】ボリバン(鹿)							○				
【OVN買い】上昇傾向							○				
【OVN買い】順張り							○				
【OVN買い】押し目						○	○				
【OVN買い】BBウォーク							○				

上の表は、あるKENSHIRO-225ユーザーが調査中の、相場の地合いと売買ロジックの関係です。

横の軸に、「強い下げ」「弱い下げ」「下げからの横ばい(ボラ大)」のように、そのときのトレンドの種類を11種類に分類し、縦軸に並んでいる各種売買ロジックとの相性を調査しています。

これはあくまで一例です。トレンドの分類は人それぞれもっと少ないこともありますし、売買しているロジックも人によって違います。

ただ、売買ロジックごとに相場の得手不得手を把握していくことで、動かさなければならぬよりも高いリターンを望めるかもしれません。

特に、そのロジックがとても苦手になっている相場のパターンを避けることで、大きなドローダウンを回避できることにつながります。

なぜこういった分析や運用が有効なのか。それは相場の地合いは常に変化するからです。いつも同じ相場なら、いつも同じロジックが勝ち続けますが、実際はそう簡単にはいかないのです、相場に合わせてロジックを出し入れするわけです。

◎ 補い合うロジックの組み合わせを見つける

相場の流れとロジックごとの相性を見極めるのは、組み合わせを見るためでもあります。

例えば、強い上昇相場では負ける傾向がある売りロジックがあるとします。単体の運用では、そういう流れになったときに停止した方が良いですが、そういう相場で圧倒的に利益を出す買いロジックを併用していてトータルでプラスになるなら、運用を止めなくても良いでしょう。

このように、苦手な局面を補完しあうロジックをポートフォリオにすることで、対応できる相場の幅が広がり、運用に安定感が出ます。

変化のタイミングを探る

◎ ファンダメンタルズから探る

市場の地合いと売買ロジックの相性を意識すべきなのは、地合の変化が頻繁だからです。

もっとも影響が大きいのは、ファンダメンタルズの変化です。年単位の大きな変動に結びついたり、最高値を更新するような値動きは、ファンダメンタルズ的な変化やニュースを伴うことがほとんどです。

市場が大きくリスクオフ(リスクを避ける動き)になった例としては、2008年に世界規模の金融不安につながったリーマンショック、2020年の新型コロナウイルスによる暴落相場が代表的です。

逆に、2012年末から一気に株高になったアベノミクスは、新政権による大規模な金融緩和への期待が下地になっています。

このように、歴史に残る大きなトレンドは、まず間違いなくファンダメンタルズ的な理由があるものです。

また、米国や日本で新政権が誕生すると、政治や経済が良くなることを期待した上昇の動きになることも多くあります。

◎ 長期チャートから探る

こういったファンダメンタルズを伴う大きなトレンドは、週足以上の長い時間軸のチャートにもはっきり現れます。

リーマンショック(2008)



上昇トレンドのサポートラインを下回って上昇トレンドが崩壊。直近安値を下回り、ファンダメンタルズも伴って強い下落トレンドに。

アベノミクス(2012~2015)



下降トレンドのレジスタンスラインを上回って上昇トレンドが崩壊。直近高値を上回り、ファンダメンタルズも伴って強い上昇トレンドに。

売買可能時間とエッジ(優位性)

◎ 取引時間が変化すれば優位性も変わる

取引可能時間は、市場(商品)によって異なります。FXは平日ならほとんど24時間取引可能ですし、仮想通貨は365日間一切休まず動いています。

それに対して、個別株やETFは9時~15時、日経平均先物は8時45分から15時15分と、16時30分~翌5時30分しか取引できません。

このように売買できない時間帯があると、それに合わせてポジションが決済されやすくなり、そこに何らかの偏りが生まれる可能性が出てきます。市場にゴールとスタートがあることで、参加者が入れ替わることにもつながります。

◎ 祝日取引可能による影響

日経平均先物は、日本の株式と連動しているため、市場がお休みになる祝日には取引ができません。ですが、2022年の秋より、祝日にも取引ができるようルールが改定されるという情報があります。

こうなると、これまでに通用してきた売買ロジックが勝てなくなったり、新たなエッジ(優位性)が生まれる可能性もあります。

2-4. 投資家の心構えと目標設定

資金の金額と計画

投資で利益を出したい、成功したいと願うのはもちろんですが、いくら資金で、どれだけの期間をかけて、これだけの利益を得たい、という具体的な目標が必要不可欠です。

優位性があるポートフォリオを作れている前提ですが、初期資金が多ければ、あるいは途中で追加できる資金が多いほど、資産は増えます。

また、時間をかけるほど投資は有利です。逆に短時間で一気に目標を達成しようとするほど、難易度は高くなります。

KENSHIRO-225の資金管理画面では、現在のポートフォリオの成績に応じて、最大ドローダウンを●%にするなら、資金が●円必要という計算が常にされています。このときの最大ドローダウンは、どれだけ高くても20%までにしましょう。最大ドローダウンの倍程度の資金減少は現実的に起きてもおかしくないため、例えば最大ドローダウンの30%の運用なら、タイミングが悪いと資金が半分以上に減ってしまうことになります。

全体リスク設定	9.5%
最低運用資金	2,259,395
余裕資金	0
合計運用資金	2,259,395

総合運用実績									
損益累計	4,045,350	全体リスク	9.5%	年平均		月平均	最大連勝日数	12	
勝率	60.9%	1DAY最大リク	-95,400	損益	773,469	損益	64,456	最大連敗日数	7
最大DD	-187,550	1DAY最大リク ²	109,100	利回り	34.2%	利回り	2.9%	最大DD期間	128
最大DD%	-8.3%	ポイントファクター	2.19	トレード数	617.0	トレード数	51.4	平均DD期間	10
損益/DD	21.569	期待利回り/回	0.055%	損益/DD	4.124				
最大リク	-215,750	最大含み損	-119,350						

この2枚の画像は、あるETFの運用なのですが、225万9395円の資金を用意して、最大ドローダウン（全体リスク）は全体の9.5%とかなり低リスクな設定。年平均の予想利回りは、34.2%で+77万3469円です。3年間単利運用すれば、資金は倍以上になる計算ですよ。

このような考え方で、資金・期間・目標を定めていくことで、具体的な運用計画を立てることができます。また、1年で資産を10倍にするというような、無謀な目標を立てることもなくなるはずです。

日々の行動が一人前のシステムトレーダーを作る

KENSHIRO-225の売買は、基本的には朝夕の1日2回操作だけで良く、外部サービスで自動売買も可能です。でも、だからといってずっと放置して、勝手に儲かるほど簡単ではありません。

ETFや日経平均先物といった、投資する市場の動向は毎日チェックして、相場の流れが変わるタイミングを察知できるようにしましょう。今がこういう相場だから、このロジックは調子が良いからロットを増やす、このロジックは合っていないので休ませる、といったマネージメント能力を磨いていきましょう。

このあたりの判断は、私のブログ(<https://trader-murai.com/>)でも解説しています。たまにチェックしてみてください。

土日など相場が動いていないタイミングで、各ロジックの成績、ポートフォリオ全体の成績を見直す時間も大切です。

あるいは、新しいロジックの開発にチャレンジするのも良いでしょう。

勉強や検証に使った時間が長いほど、技術や感覚は磨かれていくもの。じっくりシステムトレードに取り組んでみてください。

リスクを受け入れる

多くの方が投資でうまくいかない大きな理由の1つに、安定性を求めることがあります。

1年間で60万円の利益を出すことは、しっかりとした売買ロジック、ポートフォリオがあり、なおかつ数百万円程度の資金があれば、決して難しいことではありません。

しかし、毎月5万円必ず勝つことを1年間続ける(5万円×12か月=60万円)のは、非常に難易度が高いです。

月平均5万円勝てば良いのなら、5万円負けた翌月に10万円勝てば良いのように、一定の期間でカバーすれば問題ありません。

しかし、月単位で一度も負けてはいけないという条件は、とても難しいです。

なぜなら相場の動きはいつも違っていて、どうやっても得意な展開も苦手な展開も訪れます。苦手な展開のときに負けた分を、得意な展開のときに大きく稼ぐことで、全体をプラスにするのが現実的な目標となります。

ですが、この感覚は、毎月同じ金額の報酬で働いていると、なかなか受け入れられないもの。サラリーマンの給与は、そう簡単に増えも減りもしません。

この感覚で投資をしてしまうと、月単位、週単位の損失を受け入れることができず、無茶なリベンジトレードをしたり、メンタル的な負荷を受けてしまいます。

何度か繰り返していますが、とてつもなく優れたポートフォリオを構築しても、必ず調子が悪いときは来ます。負ける時期もあることを受け入れましょう。

自己投資

私たちはシステムトレーダーとして、日経平均先物に投資をしていくわけですが、私たち自身への投資が非常に大切です。

主に自己投資は、お金と時間です。将来的に大きなリターン、継続的なリターンを得るために、自分に対してお金と時間を使うことができなければ、成功できる可能性は極めて低くなります。

お金はKENSHIRO-225のようなソフトの使用料や本、セミナーなどの代金。時間はそれらを活用して知識を増やしたり、研究することです。

こういった勉強や検証をほぼせず、簡単に儲け続けられるほど投資は簡単ではありません。逆説的にいえば、そういった自己投資をできない人がほとんどなので、多くの投資家が結果を出せず去っていきます。であれば、しっかりと能力を磨きなら大きな負けを防いで向上していけば、いつかは成功できるはず、ということになります。

そういった自己研鑽を続けるための秘訣は、相場やシステムトレード自体を楽しむこと。相場の法則に気付き、それに見合った新しいロジックを作れたときは、とても楽しいものです。単純にお金のためだけでなく、知的好奇心を刺激しながら、投資家としての生活を楽しめるようになれば、成功はすぐそこだと思います。

なお、自己開発したオリジナルの売買ロジックを、トレセン+ (<https://toresen-plus.com/>) で販売をし、収益を得ることも可能です。

2-5. 売買戦略のための分析

移動平均線

ある期間の終値の平均価格を線で結んだものです。この期間は任意に設定でき、優位性が高い期間、低い期間というものはありません。

ただ、期間が短いほど直近の傾向を表し、長いほど長期的な傾向を表します。同じチャートで、移動平均線の期間だけを変更してみます。

期間5の移動平均線



期間5(=ローソク足5本分)の移動平均線は、価格の近くを推移します。

期間20の移動平均線



期間20の移動平均線になると、ローソク足と交わる回数が減ります。

期間200の移動平均線



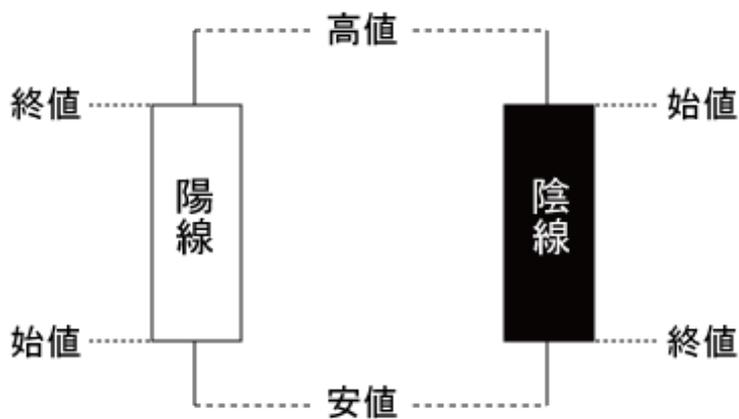
期間が200になると、長い期間の平均となるため、ずっと価格が移動平均線の上を推移していて、このチャートでは一度も交わっていません。

基本的には、移動平均線との価格の関係を売買の条件にします。例えば期間3の日足移動平均線より価格が下であれば、ここ3日間ほどは下落傾向、少なくとも上がってはいないというような考え方ができます。

ローソク足パターンと投資家の心理

◎ ローソク足の基礎

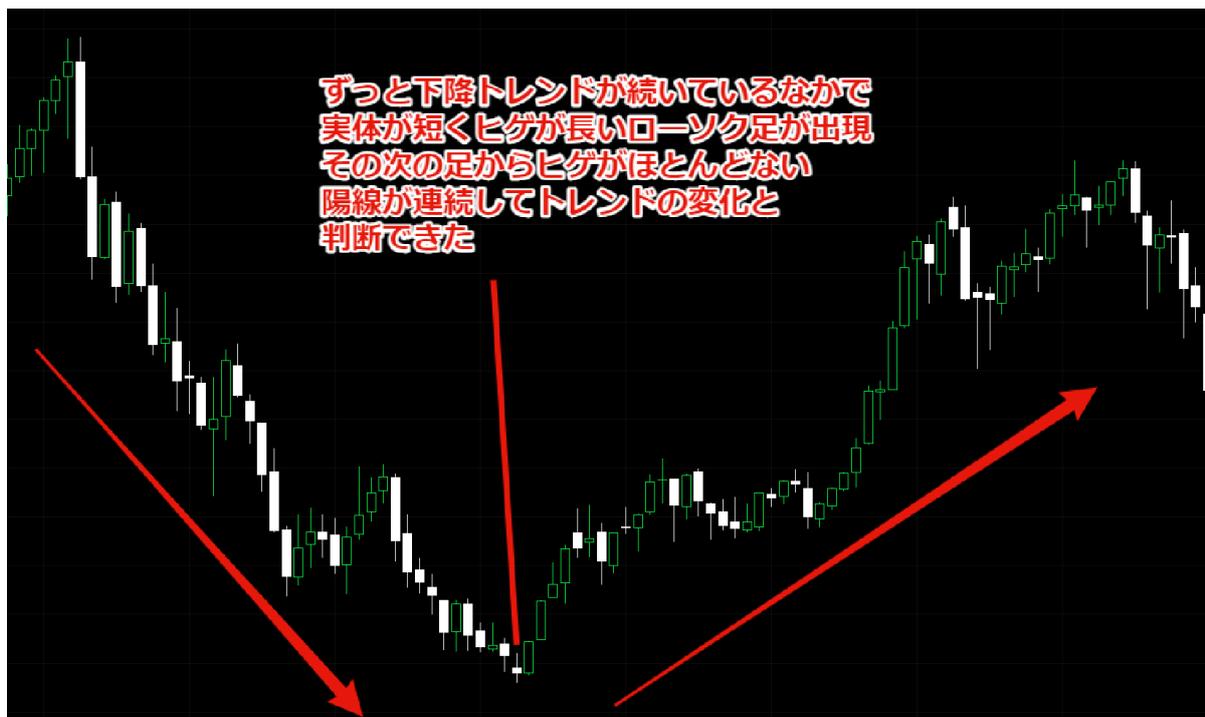
ローソク足は、始値・高値・安値・終値という4種類の価格で構成されています。始値から終値の推移を実体、実体から高値と安値に細く伸びる線をヒゲと呼びます。



1本のローソク足だけでもたくさんの情報を読み取れますが、特に覚えていただきたいのが、実体の長さやヒゲの長さによる、相場の勢いを判別する考え方です。

実体が長くヒゲが短い場合には、相場の動きに偏りがあると解釈し、明確な方向感がある場合が多いです。

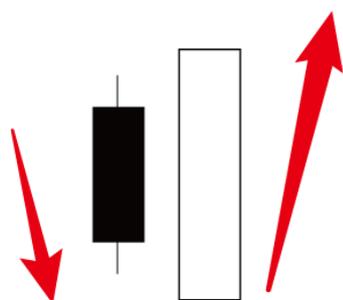
逆に、実体が短くヒゲが長い場合には、相場の動きに偏りがなく、明確な方向感がない場合が多いです。



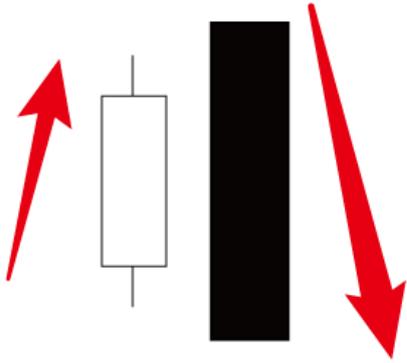
こちらの日経月足チャート(2000~2005年)はローソク足の実体とヒゲの関係が分かりやすく出ているパターンです。長く続いた下降トレンドの転換になったのは、実体が短くヒゲが伸びているローソク足で、そこから先に実体が長くヒゲが短い陽線が続くことで、トレンドの転換が確認できる動きになりました。

◎ 直前の動きを否定する形を見つけよう

ローソク足を2本以上組み合わせると、さらにいろいろなパターンで相場を判別できるようになります。ここでは抱き線という代表的なパターンを覚えておきましょう。

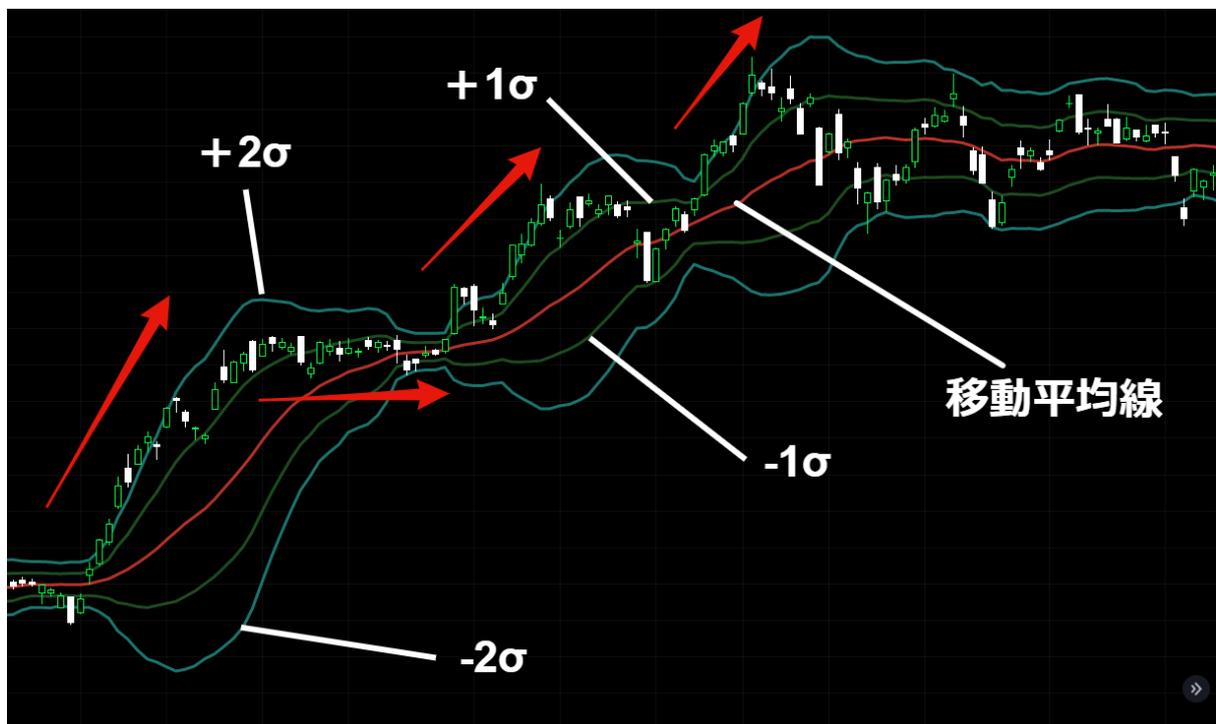


上昇に転じるパターンです。1つ前の陰線の安値(下ヒゲの先)からスタートし、陰線の高値(上ヒゲの先)を上をブレイクすると、下降を否定して強く上昇していく形になります。



下降に転じるパターンです。1つ前の陽線の高値(上ヒゲの先)からスタートし、陽線の安値(下ヒゲの先)を下にブレイクすると、上昇を否定して強く下降していく形になります。

ボリンジャーバンド



移動平均線を中心に、上下に帯が走るインジケータです。上下の帯は、移動平均線から近い順に、 $\pm 1\sigma$ 、 $\pm 2\sigma$ と数字が増えていきます。

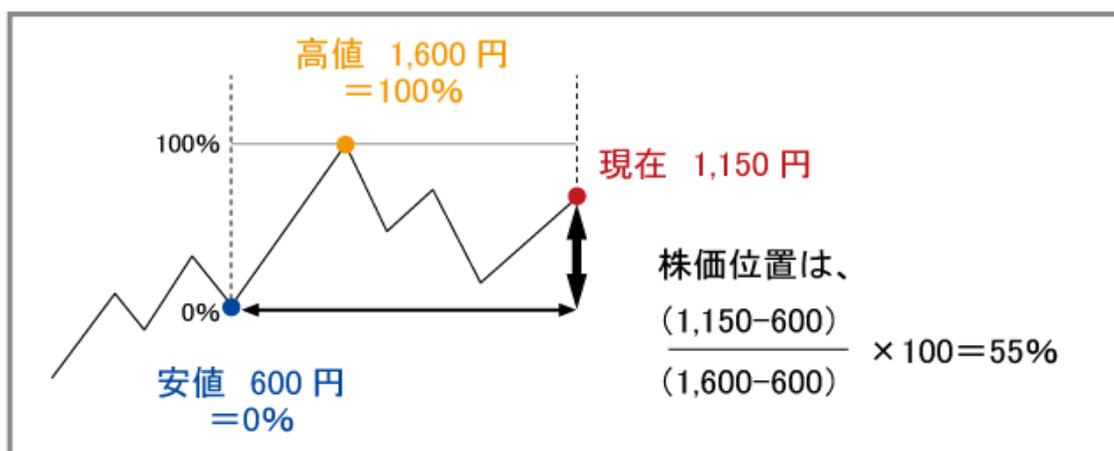
ボリンジャーバンドは、標準偏差という考え方によって、「価格がどれだけ散らばるか」を予想しようとするインジケータです。その基準になるのが、中央の移動平均線で、これよりどれくらい価格が遠くに散らばるかを計算し、上下のバンドとして図示しています。

相場に勢いがついて、移動平均線から価格が離れると、上下の帯の幅も広がります。上のチャートなら、赤い矢印が右上がりになっている上昇局面では、帯の幅が広がっています。逆に価格が横ばいでボラティリティが小さい矢印が右向きの局面では、帯の幅は狭まっています。

ボリンジャーバンドは非常に情報量が多いインジケータで、トレンドの有無と向き、トレンドの一時的な目標価格、ボラティリティの大きさ、現在の価格がトレンドのどの位置にあるのか、といったことが読み取れます。

高値と安値、価格位置

そのときの相場が上がっているか、下がっているか、横ばいかはトレード戦略を決めるときに最も重要な要素ですが、「価格がどの位置にあるのか」も、かなり大きなウェイトを占めます。



例えば上の図では、過去100日間において、現在の価格は57.1%の位置にあると計算しています。真ん中よりは少し上ということですね。

ここまで正確な計算が今すぐできなくても構いませんが、現在の価格は、過去一定期間内の値動きにあって高いのか、安いのかという点を意識することで、ロジックの精度も上がると思います。

RSI



買われすぎ、売られすぎを表すオシレーター系の指標です。

基本的には、RSIの値が一定より低くなると売られすぎなので買い。一定より高くなると買われすぎなので売りと判断できますが、強いトレンドが出ているときには、買われすぎ、売られすぎの状態が続くことがあります。

VIX指数



相場の荒れ具合を表すインジケータです。通常時は10～20の範囲内にあることが多いですが、相場に不安感が増してくると数値が上昇してきます。新型コロナウイルスの危機が表面化した2020年3月には、リーマンショック以来の80台に突入しました。

アノマリーと季節性(シーズナリーパターン)

月、週、曜日、月頭や月末、第3金曜などの特定のタイミングで、上がりやすかったり下がりやすかったりする傾向が現れることがあります。

国内で販売されている、海外の投資家の著書を翻訳した投資本では、こういった傾向のことを「季節性」と表現することが多いです。季節性でもいいのですが、KENSHIRO-225ではもう少し柔らかい表現として、シーズナリーパターンと呼ぶことにしています。

ダウとの相関

世界中の投資家は、世界中の市場に投資をしています。日本の株を買っているのは、日本人だけではありませんし、私たちも海外の株式を買うことができます。

そして、日経平均先物は、基軸通貨のドルを要する米国株式市場の影響を強く受けています。

特にその傾向が顕著なのが、日経平均先物のナイト市場。この時間帯、目標とするべき日経平均は動いていませんので、米国株式の主要な指標であるダウ平均株価に引っ張られる形で値動きすることがよくあります。

また、翌日の日経平均先物が、前夜のダウの動きを基準に上がったり下がったりする傾向も見られます。

国内の金融商品であっても、相関性のある海外の商品の動向を観察することはとても大切です。

市場ごとのクセ

◎ 先物はヘッジに使われやすいから下がりやすい

もともと先物は、長期的な買い戦略のヘッジ(リスク分散)のための短期的な売りに使われることも想定して生まれた商品です。

現物は最初から売ることはできないため、先物の仕組みを使って売り戦略を仕掛けることで、下落局面でも利益を狙うことができます。

また、ポジションを持てる期間も決まっているため、短期的な戦略に適しています。

こういった事情もあって、短期的な日経平均先物の売りが利益を得やすい展開が多くあります。

◎ 個別株やETFは長期的には上がって行きやすい

個別株や、株価指数を基準にしたETFは、長い目線見れば経済成長への期待と共に上昇していく傾向があります。よって、これらのメイン戦略は長期上昇を狙った買いのホールドが軸になります。

これに、信用取引をしなければ、売りから入れない点も影響します。

◎ FXはレンジになりやすい

FXは通貨と通貨の交換比率に投資する金融商品です。米ドルと円、ユーロといった先進国の通貨同士の交換比率が、ずっと一方向に傾き続けることはまずなく、上がったたり下がったりのレンジ相場になりやすい特徴があります。

例えば米ドル/円は、1990年代以降は75円～125円の間をずっと動いており、数十年単位のチャートを基準にすれば明確なトレンドがないともいえます。

◎ ゴールドは株価が下がると上がりやすい

太古より金は富の象徴として、常に価値を保ってきました。

特に金が求められるのは、社会に不安が蔓延したり、不景気になったときです。危険な投資を避けて、安定性のある資産に資金が移動するときに、金がよく買われます。

株価との関係で見れば、株安になると金を買われる傾向があります。

2-6. 税金について

最後に、投資に関する税金についても概要を把握しておきましょう。

確かに、投資で利益が出なければ課税されることもありませんが、将来的に必ず成功するという気概を持って望むのであれば、最初から税金の基礎も知っておきましょう。例えば必要経費に計上できる領収書を確保しておくといったことは、意識していなければできないことです。

個別株・ETFと先物は違う税制

KENSHIRO-225で取引ができる先物は税金のカテゴリが別です。

売買益は譲渡所得に分類されます。また分配金も課税の対象です。

先物は、国内FXやCFDと同じで、雑所得に分類されます。この為、必ず自分で確定申告をする必要があります。雑所得の中で、申告分離課税というルールでの課税で、どれだけ稼いでも本業の所得とは分離され、単独で課税されます。つまり年収を押し上げません。

ちなみに、海外のFXや仮想通貨も雑所得のカテゴリですが、申告分離課税ではなく総合課税、つまり他の年収と一本化され、全体の収入に対して税金がかかります。

税率はどちらも同じ20.315%

株・ETFと先物は、どちらも年間の利益に対して、20.315%が課税されます。カテゴリは違っても、税率は同様です。

カテゴリが違うと損益の通算はできない

株・ETFと、先物・FX・CFDの中では、損益の通算が可能です。株で10万円負けて、ETFで20万円勝った場合には、課税の対象は10万円となります。ただし、カテゴリ間の損益通算はできません。

負けた分は3年間繰り越し可能

どちらのカテゴリも、年間単位で損失になった分は、翌年に繰り越すことができます。よって、負けてしまった場合でも確定申告はすべきです。

経費の幅は先物の方が広い

そのトレードをするために必要だった費用は、原則的に経費として認められます。ただしカテゴリによって経費として認められる範囲は違ってきます。

株・ETFのカテゴリでは、売買にかかった手数料くらいしか経費として認められない傾向があります。

逆に、先物・FX・CFDのカテゴリでは、取引を勉強するためのソフト代、セミナー受講料、セミナー会場への交通費、書籍代、パソコンやスマートフォンの本体代、通信費、懇親会費用などが経費として認められやすいです。

経費に関して確実な答えというものはなく時期によっても変化するので、確定申告をするときに、税務署に確認をすると良いでしょう。